

Title	間接的発話行為における、日・タイの異文化コミュニケーション
Sub Title	
Author	ウィッタヤーパンヤーノン, スニサー
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2003
Jtitle	三田國文 No.37 (2003. 3) ,p.1- 15
JaLC DOI	10.14991/002.20030300-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20030300-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

間接的発話行為における、日・タイの異文化 コミュニケーション

スニサー・ウィツタヤーパンヤーノン

1 はじめに

筆者は『三田國文』第三十四号において、日本語の間接的発話行為を例にして、ごく一部ではあるが、状況設定をし、タイ語のコミュニケーション・パターンと比較しながら、分析した。その結果、日・タイの間接的発話行為の言語的な特徴・相違点と社会・文化背景や価値観の特徴・相違点を系統的にまとめて、また、その理解、対応・表現が不適切に生じる場合、そのように選択した原因や適切に使用するためのヒントや解決法をいくらか結論として得ることができた。本稿では、タイ人が頻用するタイ語の間接的発話行為を例にして、日本人のコミュニケーション・パターンと比較的に分析しながら、それぞれの特徴、相違点や共通点などについて検討したい。

いずれも、筆者は異文化コミュニケーション上のギャップが発生するのはどういふ原因によるものかということをそれぞれの具体的な問題を見つけることによって、両語の間接的発話行為の特徴、相違点を明らかにし、さらに、それらを日本語・タイ語教育の場で生かせれば、日本人とタイ人がお互いの国で接

触する際、少しでも異文化コミュニケーションの場面での誤解を回避・解消することができると期待しているのである。

2 調査の方法と分析の手順

調査の方法は基本的に『三田國文』第三十四号において行われた方法と同じなので、今回は割愛させていた¹⁾。ただし、調査対象者はタイ人日本語学習者に代わって、日本人タイ語学習者をタイ在住と日本在住の二つのグループを対象とする。

アンケートはタイ的コミュニケーション・パターンの会話・場面、対人関係を設定し、それをもとにしてタイ語のアンケートを六つ設定して作成した。

なお、アンケートでは、タイ文字とそれを表音的に示す発音記号の両方で示したが、本稿では、分析する際に引用した会話本文については本文を発音記号で示した後、()で日本語訳を付けた。

タイ語の日本語訳については、元のタイ語の表現意図を損なわない限りにおいて意識を試みた。しかし、なるべく元のタイ語の語感を残そうとしたために、不自然な日本語訳になってい

るところもある。

分析の手順についても基本的に『三田國文』第三十四号で行われた方法と同じである。⁽²⁾

3 アンケート及びインタビューの結果と分析

① <食事の誘いの断りに対応する発言>

「ノンはカイの同級生だ。今日、ノンはカイの家に遊びに来ている。夕方になったから、ノンはそろそろ失礼しようと思う。しかし、もし、その後、また食事などに誘われたら、いてもいいと思っている。カイの家を出ようとした時、カイのお母さんがやってきた。」

カイのお母さん： 晩飯を食べて行きなさいよ。

ノン： mây pen ray khâ? khôpp khun khâ?

(いえ、ありがとうございます。)

カイのお母さん：

★ 線を引いたノンの言った言葉をあなたがカイのお母さんだとしたらどのように答えますか。

A nân rō ik diăw diaw nâ? kanlang câ? sê léew diaw

câ? dâv thaan khâw daay kan

(じゃ、ちょっと待ってね。もうすぐできるから。一緒に食事しようね。)

B tham may lâ? mâv tōv kreengcay rōk mêe tham wáy

yâ? laey fīmww mêe arōy nâ?

(どうして。遠慮しないで、たくさん作ったから、私の料理……おいしいのよ。)

C rōw câ? thān nân wanlāng maa thāw jīk nâ? câ?

(そう。じゃ、また遊びにいらっしやいね。)

D ṽawn ṽawn

(その他)

以上の会話において、カイのお母さんとノンの発言を追っていくと、カイのお母さんがノンを晩飯を誘ったら、ノンは「mây pen ray」と発話した後、「khôpp khun」(ありがとうございます。)⁽³⁾とお礼を述べた。「mây pen ray」は富田竹二郎氏(一九九〇)によると、「構いません。どうぞ致しまして。無事息災だ。」の意味である。タイ人が誰かの家を訪ね、食事や飲物を勧められた場合、気持ちではその誘いを受け入れたくても、まず断るのが礼儀であると考えられている (Room Jiranukrom, 1995: p.33)。⁽⁴⁾この断る時に「mây pen ray」を使う。つまり意味のうちの二つとして「mây pen ray」は礼儀として頻繁に使われる。また、食事の誘いに対して、まず「mây pen ray」と答えるのは遠慮深い態度である、あるいは、礼儀である。従って、この会話場面においても、ノンがカイのお母さんの食事の誘いに対して「mây pen ray」という表現形式をとって、まず礼儀として断っているのである。ここでは、カイのお母さんがノンのこの礼儀としての断りの発話を聞いて、それに対してどのように適切に対応・表現するかを問題にしている。

選択肢 A は、以上の会話場面、又はカイのお母さんの食事の誘いに対する礼儀としての断りというノンの発話の意図を理解

できなかった場合、選択されるであろうものである。つまり、カイのお母さんはノンの「mây pen ray khòp khun」(いえ、ありがとうござります。)の発話が自分の誘いに応じるとい意味だと誤解して「nân rōj jīk diāw diaw nāi kamlang cāi sēt léw diaw cāi dāy than khaw day kan」(じゃ、ちょっと待ってね。もう少しで来るから。一緒に食事しようね。)というのである。

選択肢Bでは、カイのお母さんがノンの礼儀としての断りの意図を理解し、さらにこれ以上相手が遠慮しなくてもいいように「mây tōng krengcay rōk mēe than wáy yōi lay」(遠慮しないで、たくさん作ったから。)と述べ、さらに「fīmw mēe pārcy nāi」(私の料理はおいしいのよ。)と親しみのある表現を使って、また積極的に誘う。これはタイ的な相手への一つの思いやりと考えられる。

Cでは、「mây pen ray」という礼儀としての断りの発言の意図を理解できず、ただの断りと理解し、相手が断っているのだから引き止めたらわるい、積極的に誘うと相手を困らせることになるなどと思って、「r'w cāi」(そう)と相手の断りを納得した相づちを打った後「礼儀として」thāa gan wanlāng maa thiāw jīk nāi cāi」(また遊びにいらっしやい。)と挨拶した。

では、カイのお母さんがAを選択して、対応した場合、ノンは自分の発言の意図と全く反対の反応をしたカイのお母さんに戸惑うだろう。しかし、Bで対応した場合、誘った人(カイのお母さん)が親しい間柄の人なら、その誘いに応じるだろうが、誘った人が大して親しくない間柄の人の場合はこの二度目の誘

いも断って、それでも誘われた時に応じることが多い(堀江ブリヤー、一九九五⁵⁾)。そして、Cを選んで対応した場合、タイ人のノンは自分が礼儀として断ったつもりだったのに、カイのお母さんが重ねて誘ってくれないというのはもともと自分を食事に誘うつもりがなかったのだらうと思うであろう。タイでは人を食事に誘う場合、一度断られても相手の事情がどうであれ、二度は誘う。そうでないと誘う側の誠意を表していないことになる。

ノンの発言に適切に対応しようとすれば、Bを選択するであろうが、回答者はAを最も多く選択している。これは下線のノンの発話の意図の理解に問題がある。つまり「mây pen ray」の持つ間接的発話行為としての機能が理解できていない。一方、Cを選択したというのはまず「mây pen ray」における礼儀としての断りのタイ的な「礼儀」の部分の理解を誤り、さらに、断りだと理解したとしてもその対応においてタイと日本の食事に誘う時の、特に夕食の場合の習慣の違いを把握できていなかったということになる。つまり、Cを選んだ回答者には、かなり母語(日本語)のコミュニケーション・パターンの影響があると考えられる。つまり、タイ語の文法的な面はよく理解しているが、日本語の表現手法でタイ語でのコミュニケーションをしようとしたということになるであろう。また、意見の欄に「時間にもよるが、日本人ならあまり夕食には誘わないと思う。社交辞令的なものならあるけれど…」、「相手を尊重する時はC」などの意見が書かれている。回答者たちが積極的にこのBを選べなかった理由としては、まず最初に「tham may lai」

(どうして) という断った理由を聞く言い方は日本人には好まれない。又、「断り」の発言は単純に断っているのか、遠慮して断っているのか区別が付きにくい。Bの「遠慮しないで」以下のような誘いは強引だと思われる可能性が高い。故にBを敬遠したのではないだろうか。

以上のように、タイと日本の異文化コミュニケーションの場において、「mây pen ray」というそれぞれの場合でそれぞれ違った機能を持つて表れる表現形式の理解が求められる時、表現手法や習慣の違いに「mây pen ray」の理解の難しさが連動して誤解がしばしば生じる。

② 映画の誘いの断り

「今日仕事をしているところにあまり親しくない先輩が来て、仕事が終わったら映画を見に行こうと誘う。」

先輩 … 『ハリー・ポッター』のチケットが二枚あるんだけど、一緒に見に行かない？

あなた …

★ あなたは別に用事はありませんが、行きたくありません。どう断りますか。

A khǎo thǎot khǎ? díchǎn mây chǎp nǎi praphǎet nǐ
(すみません、私……こういう映画があまり好きじゃありませんです。)

B mây pen ray khǎp khun wanlǎng chuan mây nǎ? khǎ?
(いいんです。ありがとうございます。また、誘って下な

いね。)

C ?aw wáy wanlǎng dǎy mây phǎocǐi wannǐ mii thǎr?
(他の日にしてもらえますか。今日は用事があつて…)

D ?awn ?awn
(その他)

この設定は右記の会話場面を理解した上で、どのように適切に対応・表現すればよいかということの問題になっている。つまり、この会話場面において、あまり親しくない会社の先輩にどのように映画の誘いを人間関係が壊れないように適切に断るかということである。では、この会話場面では、誘われた「あなた」が、誘った先輩にAの「khǎo thǎot khǎ? díchǎn mây chǎp nǎi praphǎet nǐ」(すみません、私……こういう映画があまり好きじゃありません)を選択して、実際に断る場合、聞き手である先輩は、どう受け止めるのだろうか。Aの発言は「chǎo thǎot」(すみません)と謝った後、このような映画は好きではないと、自分の映画の趣味を陳述して、間接的に先輩の誘いを断っているのであるが、先輩はそれを聞いて、相手は映画の趣味を口実にして実は自分と一緒に行きたくないのではないかと、思うかもしれない。また、Bでは、まず「mây pen ray」(いいんです)と述べた後、誘ってくれたことにお礼を言いつつ、さらに、また改めて誘うことをお願いすることによって、間接的に断りの意図が込められている。しかし、Bの「mây pen ray」(いいんです)は礼儀として遠慮深い態度を示す①の会話の下線の「mây pen ray」(ええ)と違つて、同じ「mây pen ray」でもこの会話場面では「mây pen ray」(いいんです)が使われる

と、失礼なことになる。なぜならば、ここで「mây pen ray」を使うと、文字通りの意味、つまり自分が相手から迷惑を被っていて、それに対して「構いません、いいんです」という意味に解釈され、相手に対して失礼になる。これが一つである。さらに、立場の下の者から上の者に文字通りの意味の「mây pen ray」を使うと失礼になるということがある。そうすると、Bを選択する場合、聞き手である先輩は、どう受け止めるのだろうか。後輩なのに偉そうに言つて、失礼だと思ふことが考えられる。

また、Cでは、「Paw way wanl'ang daay may」(他の日にしてもらえますか)と他の提案を出した後、「phoddii wannii mi: thaxá?」(今日は用事があつて。)という断りの理由になっている当日の都合を説明することによつて、間接的に先輩の映画の誘いを断る意図が込められている。タイ人は、以上の会話場面において、このように提案を出し、さらに自分の断りの理由になる状況を説明するという表現手法を使つて、断ることを間接的に伝えることが多く、Cの選択肢はいわゆるタイ的なコミュニケーション・パターンと言える。

以上の会話場面を理解した上で、適切に対応・表現すれば選択するであろうCの割合が最も高い。さらに、他のアンケートの設問と比べると、Dの「その他」の割合が高い。

以上のように回答者の多くは、Aの発話は先輩の誘いを断るのにあまり適切ではないと考えたということが分かる。つまり、先輩がせっかくな選んだ映画が自分の好みではないことを理由に間接的に断るという表現手法を使う場合、先輩との人間関係が

壊れることが考えられる。また、Cを選んだ人の割合が最も高いということは、この問題が言語的に簡単だということよりも、日本人もタイ人も以上の会話場面では同じような価値観を持ち、同じような表現手法を使うということが言えるだろう。つまり、日本人もタイ人も自分より立場の高い者には、特に断り(拒否)という当事者間に何らかの緊張関係を生み出す行為を行う時、相手を傷付けないようになるべく直接的な感じのする発言を避けて、やんわりと遠回しに断るという表現手法が好まれるということである。また、他の問題と比べるとDの「その他」の割合が高いというのは、以上の会話場面ではA、B、Cの選択肢以外の表現手法があると回答者が考えたことになる。意見の「欄」によると、まず「すみません」と謝るか、それとも、相手を傷付けないように「行きたいけど」や「行きたくない訳ではないけど」のように前置きを言つてから理由を説明する表現手法を使う人が多かった。また一緒に映画に行けないという断りの理由にもいろいろある。例えば、その映画は友達と見に行く約束をしていることや、今日は用事があることなどが主なものである。

③ ②の映画の誘いの断りに対する発言

▲ 「あなたがこの先輩だとします。断られたので、さらに誘つても相手は行こうとは思いませんでした。その時、どう言いますか。」

A r'w kháp naa s'adaday can

(そう。残念ですね。)

B *mây pen ray khràp gán ?aw wáy wanlǎng kǒo léew kan*
(いよいよじゃ また 今度)

C *kǒo dǎay gán wanlǎng thǎa chuan khun tǒng yoom pay*
nǎ?
(いいよ。でも、今度誘ったら絶対行かなくちゃだめだよ。)

D *?awn ?awn*
(その他)

この設定は②の会話場面を理解した上で、②のあなた(後輩)の断りの行為にどのように適切に対応・表現すればよいかという問題をしている。

Aの「*?w kw khràp nǎ sǎday can*」(そう、残念ですね)という発話は、まず「*?w kw khràp*」(そう)という相手の断った意図を理解した相づちを打った後、一緒に行けないことを残念に思う気持ちを陳述している。これは「先輩の誘いを断ったら、先輩が怒るのではないか」と後輩に心配させないように気を遣う断りの対応になっている。タイ語では、このような場面では相手を気遣って何らかの言葉をかけるが、Aの発話のような表現形式ではない。つまり、「*nǎa sǎday can*」(残念ですね)のような発話の場合、その発話を聞いた後輩は安心するというよりも、自分が断ったことによって先輩をかくく失望させたのではないかと解釈するおそれがある。

Bでは、まず文字通り「*気にしない*」という意味を持つ「*mây pen ray*」(いよいよ)を述べた後、「*?aw wáy wanlǎng kǒo léew kan*」(また、今度)というように今回はだめでも次回があるか

と気にしなくていいと相手を気遣って言う。特にBの「*mây pen ray*」は「*mây pen ray*」の典型的な使い方の一つで、立場の高い者が立場の低い者から何か好ましくないような言い方や行為をされた時、立場の高い者の方が「*mây pen ray*」と言わないと、立場の低い者は自分を許していない、怒っていると考える。故にこの会話場面では先輩が「*mây pen ray*」といったのは典型的なタイ人の気遣いの言い方の一つと言える。

Cでは最初「*kǒo dǎay*」(いよいよ)と言ったが、その後「*gán wanlǎng thǎa chuan khun tǒng yoom pay nǎ?*」(でも、今度誘ったら、絶対行かなくちゃだめだよ。)と、その時の声の調子や態度によっては冗談のようにも聞こえる。が、強調しすぎて次の誘いには応じないといけないと無理に約束させられたと思う可能性が高い。よってCを選んだ割合は低かった。

②のあなた(後輩)の発言に適切に対応・表現しようとすれば、Bを選択するであろうが、日本人回答者がAを50%と最も多く選んでいる。

この割合を見て、まずAを選択した人が50%に達したことはどういう意味があるのだろうか。③の意見欄を見てみると、日本人がこのような場面で対応・表現する時、「急な話だったから仕方がないですよ。また時間がある時に行きましょう。」「*気にしないでください。また今度。*」などの表現を使用するという意見や、また、一度断られたらもう誘わないと思うが、一応「*それならまた今度。*」と言う、という意見もあった。これらの意見から、日本人も同じ場面でBを選択するであろうことが考えられる。Aを選んだのは、タイ人はAにある「*nǎa sǎday*

cas] (残念ですね) のように素直に気持ちを表現するのではないかと誤解したからであろう。このことは、回答者へのインタビューにおいて、タイ人の方が日本人よりはつきり気持ちを表現する傾向があると感じている人が多かったということにも通じる。しかし、これは場面や状況によっては、必ずしもそうとは言えないのである。

以上の会話場面では、タイ人も日本人も、自分が断られても二人の関係が悪化しないように聞き手を気遣って何らかの言葉をかける。またCの割合が低いというのは、Cの発話のように相手の行動を自分の気持ち通りに強制するような表現手法はあまり使われないことが考えられる。

以上のことから、異文化コミュニケーションの場を考える場合、同じ表現手法を使っている、お互いの国民性に対する勝手な思い込みのため、適切ではない発話を使って相手を傷付けたり、人間関係が壊れるということが考えられる。

④ <言にくい事情の伝達>

「あなたはあるタイの会社に勤めている。ある日、タイ人の課長が日本語のチェックを頼みに来る。チェックしたら、間違いだらけだった。」

★ タイ人の課長にどう言いますか。

A khít wáa kée yān nī cā? dī kwāa māy khā?
(どういうふうに直したらどうでしょう?)

B khít wáa ruam ruam kō dī nā? khā? kée jīk sōng sām m thī kō khong cā? dī khwān

(全体的にはいいと思います。2、3ヶ所直したら、もっとよくなると思います。)

C phit yā? laay khong tōn keekhāy laay thī
(たくさん間違っているので、何ヶ所か直さないと行けないでしょう。)

D ?wān ?wān
(その他)

この設定は「あなたが上司に日本語の文が間違いだらけだったということ伝えたいと思っており、この上司にどのように適切に表現すればよいかということの問題にしている。

選択肢Aでは、間違いだらけだったという事実を直接に伝えないで、「khít wáa kée yān nī cā? dī kwāa māy khā?」(どういうふうに直したらどうでしょう?)と上司の意見を聞くという疑問文の形をとって、より適切な日本語にすることを勧め、間接的に間違いがあつた事実を伝えている。

Bでは、まず自分の意見として「khít wáa ruam ruam kō dī nā? khā?」(全体的にはいいと思います)と上司の日本語の文に対して全体的な印象を陳述した後「kée jīk sōng sām thī kō cā? dī khwān?」(2、3ヶ所直したら、もっとよくなると思います)というように事実を過小化して陳述している。

Cでは、まず「phit yā? yē? laay」(たくさん間違っている)と事実を直接的に指摘し、その後、その間違つた文をどうするかということ述べている。

Aの発話では上司の文が間違いだらけだったということ直的に述べないが、より適切な日本語にすることを勧める。

この発言によって上司は自分の文が間違いだらけであるという事実を把握することができて、さらにそのことを快く受け止めることができる。

では、Bの発話の場合、タイ人の上司ならどのように受け止めるのだろうか。確かにBの発話ではAの発話と同じように、上司の日本語の文が間違いだらけだったという事実を直接的に陳述せず、事実を過小化して発言している。しかし、この発言を受けた後、実は間違いがたぐさんあったということが分かったら、上司は相手がうそをついた、不誠実だというように怒るだろう。

Cの場合はどうだろうか。事実を陳述しているので、うそを言う、不誠実だということにはならないだろうが、自分が上司であるということもあり、部下にあまり直接的に言われると、随分失礼な人間だと思うのではないだろうか。それは、日本人でも同じだろう。

タイ人の上司に適切に表現しようとする場合、タイ人ではAを選択するのが一般的だが、日本人回答者では、Bを50%と最も多く選択している。

以上の割合から言えることは、母語（日本語）における表現手法の影響があるということである。日本人は以上の会話場面のように言いにくい事情を伝えなければならない時、後ろに控えているその事情に対するショックをやわらげ、相手を傷つけないようにするため、まず、最初にほめたり、好印象の感想を述べたりするようだ。

Room Jirankrom (1995)によると、タイ人において、間接

的発話行為が発生する一つの理由としては、自分あるいは相手の面目を保つということがあげられる。従って、タイ語ではCのような発話は不適切である。また、日本人の場合、はっきり言うことによって相手に嫌われるのではないかと心配して、ある程度、距離を置いている人には、Cを発話しないだろう。インタビュールによると、「全体的にはタイ人のほうが日本人よりはっきりものを言うという印象があるので、Cを選んだ」とあったが、これはタイ人の表現手法を十分に理解できていないため、一般的に言われていることを鵜呑みにしたのが原因であると考えられる。タイ社会では昔から立場や年齢の高い者を尊敬するという習慣を堅く守っている (Sani-Samakgan, 1993)。この習慣がタイ人の間接的発話行為における表現手法に影響を及ぼしている。しかし、この場面では、実際にタイ人にこのアンケートを行ったときの意見にもあったが、タイ人は上司に対して事実と異なることを言うことはしない。タイ人に一般的に浸透している仏教的な考えの影響だろうが、うそをつくことはよくないと考えられている。自分より立場や年齢の高い者を尊敬するという習慣があるけれども、上司にとって言われて嬉しくないことを伝えなければならない時、部下はそのことを直接的には言わないが、たぐさんある間違いを2、3ヶ所、と言うように事実と異なることを言うこともしない。事実と異なることを言えば、これは逆に上司に対して不誠実であり、失礼であるということになる。しかし、日本人は同じ習慣を守るために、Bのような言い方をして上司の立場を尊重し、上司を思いやるのである。

以上のことから、日本とタイの異文化コミュニケーションの場を考える場合、自分より立場の高い者に対する考え方や習慣が同じでも、立場の高い者へ何か発話をする場合、その発話における表現手法やその表現手法に表されている価値観の違いのため、その立場の高い者の顔をつぶしたり、不誠実だと誤解されるおそれがある。

⑤ 仕事の失敗の注意

「中山さんはタイにある日本企業で働いている。ある日、タイ人の部下があなたの任せた仕事を失敗した。そのせいで仕事が遅れてしまった。」

★ あなたが中山さんだとしたら、あなたはこのタイ人の部下にどう注意しますか。

A karunaa yaa tham yàanpñi ðik dāay mǎy

(今後はこういうようにしないでくれる。)

B ðòk tǎn lǎay khraŋ léew waa yaa tham yàanpñi

(何回も言っただけ。もうどうもをしないで。)

C mǎy pen ray nǎ? khraaw nǐ ðò pay háy rawan nǎy

kò léew kan

(今回はいいけど、今後、気を付けるように。)

D ðáwn ðáwn

(その他)

この設定は中山さんが任せた仕事を失敗したタイ人の部下にどのように適切に注意の表現をすればよいかということの問題にしている。

選択肢 A では「karunaa yaa tham yàanpñi ðik dāay mǎy」(今後はこういうようにしないでくれる。)

と「dāay mǎy」を使って疑問文の形をとり、依頼を意味する助動詞「karunaa」と警告を意味する「yaa」(……ないように)を使って、注意している。

B では、「(もう)どうもをしないで……」と何回も言ったことを主張することによって、注意している。

C では、まず「mǎy pen ray nǎ? khraaw nǐ」(今回はいいけど)と今回失敗したことを許している態度を示した後、今後は気を付けるようにと勧告することによって、注意している。

では、聞き手であるタイ人の部下はそれぞれの発話を聞いて、どのように受け止めるだろうか。まず、A と B の発話では、両方ともかなり厳しく注意しているが、A の場合は丁寧に依頼をするとき使用する「karunaa」を使用しているため、丁寧な発言ではあるが、厳しい表現手法と言える。また、B の場合は「あなた(相手)が仕事を覚えようとしないうような相手の人格や能力にまで評価を下すことになるので、普段はここまで言わないだろう。従って、タイ人の部下が上司に A あるい B で注意された場合、そのタイ人は落ち込んでしまうか、あるいは、顔をつぶされたと思って怒ってしまうことが考えられる。

以上の場面を理解した上で、上司が部下に適切に表現するならば、C を選択するのがふさわしいが、回答者は A を最も多く選択している。

以上の結果から、回答者が場面・状況を理解しても、その場面・状況の裏に隠れている文化的前提の理解ができていないと

ということが考えられる。

Sanit Samakgaanによると、「タイの社会は個人主義の社会であり、個人を大事にし、その面子はその人に相当するものと考えている。一般的には、人あるいは自分の体面を損うような行為は好まれない。従って、タイでは上司は権力を持っていても、直接それを権威的な態度で示さないで、できるだけ相手の部下の面目を重んじようとする(1993)。これは日本の上司と部下が上下の力関係ではつきりと位置づけられているのは異なる。意見欄にもあげられていたが、日本の職場の場合、「仕事の面で上司は大変きついことを言うのが当たり前、また、間違いをはつきり指摘する。人によっては叱つたりする。上司の性格によって言い方が違うが、一般的にはもつとひどいことを言う。」などのように、より直接的な態度を表すという文化的前提を持つている。これは、仕事の失敗が個人の失敗でおさまるのであれば、ある程度許されるだろうが、日本の職場においては、常に会社という組織で物事が動くため、上司と部下の関係も普通の人間関係と違って、会社の損得の論理が働き、給料をもらって、仕事をしている以上は上司も部下も会社の充実に貢献しなければならぬということである。このため、日本では仕事に関する失敗の場合、Aなどのような直接的な発言を上司がするというようなこともあるようだ。しかし、タイの職場の場合、上司は以上のような態度をとると、部下に嫌われて、部下が協力的ではなくなるおそれがある。

Room Jirankron (1995)によると、「タイ人において間接的発話行為が発生するもう一つの理由はその発話に二つの意図を

込めているためである。つまり、このような注意の場面では上司が部下に注意すると同時に今後もし事に励んでほしいというはげましの意図を伝える表現手法を使い、そういう上司の態度を示しているCを発話することはタイ人の部下に対しては一番適切である。また、上司がこのような態度を示すことによって、部下は落ち込むことがないし、今後のことを頑張ろうとするのである。

以上のことから、日本とタイの異文化コミュニケーションの場を考える場合、文化的前提に基づいた表現手法やその文化的前提の違いが上司と部下のコミュニケーション・ギャップの原因になると言える。

⑥ ヘチケット購入の依頼

「あなたは母校の大学の同窓会委員です。来月中旬この同窓会主催でチャリティコンサートを行うことになりました。それで、今働いている会社の上司にコンサートのチケットを買ってもらうことを頼みに行く。」

あなた… 部長。ちよつとよろしいでしょうか。

上司… 何。

あなた… 来月の第二月曜日、お時間がありますか。

上司… ん？

あなた… 実はその日に大学の同窓会がチャリティコンサートをやるんです。

上司… ？？何？

あなた…

★ チケットを買ってもらうために、上司にどう依頼しますか。

A karunaa chday sww tua nøy sî? khâ?

(チケットを買ってくださる?)

B mây sâap phoo cã? rópkuuan húa nã chday sww bát khonsâet nøy dâay mây khâ?

(「迷惑かもしれません」が、チケットを買っていただけないでしょうか。)

C huânã tñjkaan bát mây khâ?

(チケット、いりませんか。)

D ?áwn ?áwn
(その他)

この設定は以上の会話場面を理解した上で、部下であるあなたが上司にどのように適切にチケットの購入を依頼すればよいかということの問題にしている。従って、どれを選んで間違いないことはないが、その発言によって、上司である聞き手はチケットの購入を協力するか、あなたの言葉遣いが失礼だと思ってしまうことになるのである。

タイ語では、依頼文を言う時「chday」「karunaa」あるいは「prót」という助動詞を使って依頼をする。前後順で丁寧さが増すが、日常会話では最後の「prót」は使わない。

「karunaa」の形で使うのが、一般には最も丁寧な依頼表現である。従って、選択肢Aで「karunaa chday sww tua nøy」という表現を用いて依頼するというのは、形式的には最も丁寧であると言える。また「nøy」は「少し、ちょっと」という意味で

あり、依頼文の最後に用いることによって、文が和らげられるようになる。

Bでは、まず「mây sâap phoo cã? rópkuuan」(注：本来「mây sâap」は「存じません」「rópkuuan」は「迷惑する」という意味。)とどう前置きを述べている。この前置きを述べる

ことによって、発話者の遠慮する気持ちを表すことができる。その後「chday sww bát khonsâet nøy dâay mây」の表現形式を用いて依頼する。この発話の最後に「dâay mây」が用いら

れているが、「dâay mây」を直訳すれば、「できるか」という可能性を聞く意味である。しかし、この発話では「dâay mây」を使うことにより、質問文の形をとって、行為者である聞き手に

「チケットを購入する」という気持ちがあるかどうかを問うものになる。従って、Bの発話はAの発話より、へりくだって、間接的な発話になると言える。

Cでは「tñjkaan bát mây」(チケット、いりませんか)という聞き手の希望を問うことによって、間接的に依頼している。

以上の会話場面において、上司である聞き手はそれぞれの発話に対してどのように受け止めるのだろうか。

上司である聞き手が最も快く協力するのはBではないだろうか。Aの発言も丁寧な依頼表現ではあるが、直接的な感じがし、場合によっては、指示または命令とも受け止められかねず、むしろ、上司に対してこのような表現を使うと失礼になるのである。Cの場合、相手がその切符を欲しがっているということを前提にして、チケットを相手に買ってもらうにもかかわらず、こちらから相手に恩恵を与えるというニュアンスが込められる

ことになるため、自分より目上の人には使わない。従って、上司に対して、Cを用いると、間違いなく怒られるであろう。

以上の会話場面を理解した上で、上司である聞き手に対して適切に表現すれば、Bを選択するのがふさわしいであろうが、回答者はAを50%以上も選択している。

「依頼」は相手の将来の行為を自分の意思に適合させようとする発話行為であるため、依頼する側にもされる側にも双方に負担が生じる。従って、日本人もタイ人も何かを依頼する場合、依頼する側とされる側が親しい間柄なら、直接的な依頼表現あるいは簡略化された依頼表現が使われるが、目上の人や社会的地位の上の者に対しては丁寧で間接的な表現を用いて依頼することが一般的であると考えられる。しかし、Aの割合が高いというのは、形式だけの丁寧さを考えた結果不適切な選択をしてしまったと考えられる。つまり、確かに「karunaa」を使用すれば、形式的には丁寧な文になるが、相手に対する配慮という点に対しては必ずしも丁寧ということにはならないため、最も丁寧な発話を使用すれば、無難であるという考えだけではここでは不十分なのである。

さらに、前述のように、依頼文に「karunaa」という助動詞を使うと、丁寧な依頼表現となるが、実際のタイ人の日常生活ではほとんど使われない。しかし、日本人用のタイ語教科書を見ると、「karunaa」は、丁寧な依頼表現としてあげられている。文法的には正しいが、実際にどのような状況で、また、どういう相手に使えばいいのかが説明されていない。インタビュースると、「karunaa」が丁寧な言葉であると教わったので、とり

あえず、「karunaa」を使えば、無難だと思ってAを選択したという答えが多かった。これはタイ語教育の場で実際に起こっている問題であると考えられる。つまり、「karunaa」を使うとタイ語として非常に丁寧な言い方になるだろうとたいいていの学習者は思い込み、Aを選択した。しかし、どんなに丁寧な言い方であっても、直接の依頼には使わないのである。

以上のことから、異文化コミュニケーションの場を考える場合、目上の人や社会的地位の上の者に依頼するということに対する価値観が同じであっても、その会話場面に適応する言語運用の能力や教育の場で起こっている問題のために、コミュニケーションに障害が生じることがあると言える。

4 結論

4・1 間接的発話行為における言語的特徴・相違点

1、語や句の添加による方法

『三田國文』第三十四号において、日本語の発話行為をいくつかまとめたが、タイ語の方はどうだろうか。タイ語は日本語と違って、動詞に活用がなく、例えば、命令形の場合、「行く」は「行け」と変化することでわかるということはない。従って、直接的発話行為の命令や依頼の場合、「chay」や「karunaa」という助動詞を動詞の前につけることによってその意図がわかるようになってきているが、間接的発話行為の場合、表現形式や表現手法が違うので、その際、文末の語気助詞で発話者の意図を伝える。①の選択肢Bの「tham may ta?」の「ta?」、⑤の選択

肢Cの「mây pen ray nã?」の「nã?」、「tò pay hây rawan nây」の「nây」、⑥の選択肢Bの文末の「day mây」はそうである。「nã?」は相手の考えや気持ちに反対し、また許可を与えるニュアンスが込められている。つまり、発話者（カイのお母さん）は話し手（ノン）に、ノンの遠慮する気持ちに強く反対し、自分（発話者）には遠慮しなくてもいいよという自分より下の者に気楽に誘いを受けとめてもいい、礼儀の遠慮などしなくていいという態度を伝えている。

「nã?」は文末につけると前の情報を強調し、「mây pen ray」（気にしないで）という許すという態度を示すと同時に、注意の意図も間接的に伝えている。

「nây」は日本語の「ちょっと」に似ていて、数量や程度が少しという本来の意味もあるが、注意文などの後につけることによって文全体を和らげる働きを果たす。

「day mây」は本来「できるか」という意味を持つが、依頼の場合、依頼の内容の後につけると文全体が和らぎ、より丁寧な依頼の態度を示す働きをする。

また、文頭の添加にはまず、②の選択肢Cの「phocdi: wanní mi: thutã?」（今日は用事がある）の「phocdi:」であるが、「phocdi:」の本来の意味は「丁度」である。しかし、申し出の断りの理由を述べるとき、「phocdi:」を文頭に使うことによつて、あなた（誘った人）がきらいだからわざと断るのではない、たまたま別の用事（理由）があるだけである、という相手に対して思いやりを示す働きをもつ。

そこで、④の選択肢Aの「khit waa kée yàng ni cá? dii kwáa

mây」(こういふふう)に直した(こうでしようか)の「khit waa」は日本語の「……だと思ふ」に似ていて、断定を避けて「khit waa」を文頭につけると、話し手がそう思っているのにすぎないのだということになる。相手に自分の意見や主張を押し付けず、相手を尊重し、思いやりがあるという働きを示すのである。

また、依頼の場合、⑥の選択肢Bのように文頭に「mây saap phoc cá rópkan」という「遠慮式」の前置きを述べると、聞き手に対する話し手の遠慮の態度を示し、間接性の度合いが高まって、文全体がより丁寧になる。また、主文を強く響かせない働きをするのである。

II、表現の慣用化による方法

これは特に人間関係に緊張を与える可能性が高い場面において、直接的な表現を避けて言葉を変えてやわらかく拒否、反対、否定の意図を示す場合に使う慣用的な表現のことである。例えば、「考えさせて下さい」や「君の気持ちはよく分かる」などがこれにあたる。そして、タイ語における最も間接性の度合いが高い発話は①の「mây pen ray」であろう。堀江ブリヤー（一九九五）によると「mây pen ray」には「文字通り「気にしない」といった意味から、礼儀としてのあいさつをする、慰める、励ます、許す、思いやりを示す相手のメンツを保つ、遠慮を示す、あきらめ、相手をなだめるなど多様な使われ方がある。

こうした表現では、文字通りの解釈は求められておらず、文脈や場面に対応した半ば慣用句化した表現の機能の理解、つまり、間接的発話行為としての意味（発話者の意図）の誤解を生

じさせないための理解が求められる。故に、発話に間接性を働かせている特定の文脈や場面を適切に理解する必要がある。

4・2 間接的発話行為におけるタイ的なコミュニケーション・パターン

今回の調査によってわかったもうひとつの問題は、日本人学習者による、タイ人が日本人よりはっきりものを言うという国民性に対する勝手な思い込みの問題である。確かに全体的にタイ語の間接的発話行為のほうが、日本語のそれより、直接的な感じがする。しかし、これは場面や状況によって必ずしもそうとは言えない。例えば、②と④で誤解が生じたように、この思い込みのため、回答者の多くは、適切ではない発言を選んでしまった。この場合相手を傷付いたり、人間関係が壊れるということが考えられるのである。

タイ語の慣用語に「*Tua mǎy hǎy chám nām mǎy hǎy khǎn*」というのがある。「沼で魚をとるには蓮をいためないように、水を濁さないように気をつける」という意味である。つまり、何か行動をする際には、周囲のことに気を配らなければならぬという意味である。タイ人の表現手法・形式にもこの慣用語の教えが表れている。タイ人も日本人と同じように、相手を傷付いたり、相手に負担をかけたリするような場合、直接的な発話を避け、なるべく間接的に伝えるのである。

タイ社会では昔から立場や年齢の高い者を尊敬するという習慣を堅く守っているので日本人と同じように、特に自分より立場の上の者に対しては態度や言い方に普通より気を配る傾向が

ある。例えば、⑤の会話場面において、上司にとって言われて嬉しくないことを伝えなければならぬ時、日本人の場合、シヨックを和らげ、相手を傷つけないようにするため、一般的にはまず、最初に誉めたり、好印象の感想を述べたりする。つまり、この会話場面においては間違いがたくさんあったにもかかわらず、「全体的にはいいと思います」と言った後、「2、3ヶ所直したら、もつとよくなる」というように事実を過小化して述べている選択肢を選ぶ回答者が多かつたのである。これはひとつの日本人の思いやりであると言える。それに対して、タイ人の場合、もちろん「たくさん間違つた」と、直接的には言わないが、事実と異なることを言うこともしない。これは仏教の教えでもあるが、うそをつくようなことを言うことはよくないとい一般的に考えているということもある。さらに、事実と異なることを言えば、これは逆に上司に対して不誠実であり、失礼であるということになる。

また、タイの社会は個人主義の社会であり、個人を大事にし、その面子はその人に相当するものと考えられている。一般的に、人あるいは自分の体面を損うような行為は好まれない。従って、タイでは上司は権力を持っていても、直接それを権威的な態度で示さないで、できるだけ相手の部下の面目を重んじようとする。これは日本の上司と部下が上下の力関係ではっきりと位置づけられているのとは異なる。これによって、例えば、⑤の上司が仕事の失敗を注意する時、タイ人の上司の場合、日本人の上司と違う工夫や表現形式を使うのである。

注

- (1) スニサー・ウィッタヤーパンヤーン(平成十三年)、「間接的発語行為の考察について」『三田國文』第三十四号、P56-73を参照のこと。
- (2) 前出(注1)と同じく、前掲小論P56-73を参照のこと。
- (3) 富田竹二郎(一九九〇)、『タイ日辞典』改訂版、養徳社。
- (4) Room Jirankrom (1995), Phasasat Newpatitaniyom. Chiangmai University.
- (5) 堀江ブリヤー(一九九五)、『マイムンライ』国立国語研究所研究報告Ⅲ、くろしお出版。
- (6) Samt Samakgan (1993), Theknoloyimai kap Khaniyom khong Khon Thai. Sukhothainamathiraat University.